

作品解説

●礪山 雅

■ピアノ・ソナタ第1番ハ長調 KV279 (189d)

1774年の12月から75年3月にかけて、モーツァルトはミュンヘンに滞在した。歌劇《にせの女庭師》を上演することが、その目的であった。この滞在の副産物として、6曲のピアノ・ソナタが生まれてくる。19歳を迎えるころ初めて、モーツァルトはピアノ独奏用の本格的なソナタを書いたわけである。この6曲を献呈されたと考えられるタデーウス・フォン・デュルニッツ男爵は、バイエルン選帝侯の侍従をつとめていた音楽愛好家。彼はファゴットの演奏に優れていたといわれ、モーツァルトはいくつかのファゴット作品をも、男爵のために作曲している。

六つのソナタはひとつのまとまりをなして書き下ろされているが、またそれぞれに、独自の趣向をもつ。その中で、第1番ハ長調の特徴は、そのよどみのない即興性にあるといえよう。初めの二つの楽章には、とくに楽想のファンタジー風の湧出が目立っているが、構成をたどってみると、三つの楽章はいずれもソナタ形式をなしている。のちのソナタのための発展の器が、ここですでに出来上がっているわけである。

第1楽章 アレグロ、ハ長調、4分の4拍子。

第2楽章 アンダンテ、ヘ長調、4分の3拍子。

第3楽章 アレグロ、ハ長調、4分の2拍子。

■ピアノ・ソナタ第2番ヘ長調 KV280 (189e)

デュルニッツ男爵のための六つのソナタの第2曲。両端楽章が3拍子で書かれ、中間楽章には8分の6拍子が選ばれているために、舞踊組曲を思わせる快い律動感が、全曲を流れている。このソナタの随一の聴きどころは、第2楽章のアダージョだろう。ヘ短調（古来苦しみの表現に用いられた調性）によるこのアダージョ楽章は、切々たる情感をシチリアーノ風のリズムによって歌いあげて、聴く者を魅了する。「短調のモーツァルト」の原型のひとつが、ここにある。

第1楽章 アレグロ・アッサイ、ヘ長調、4分の3拍子。

第2楽章 アダージョ、ヘ短調、8分の6拍子。

第3楽章 プレスト、ヘ長調、8分の3拍子。

■ピアノ・ソナタ第3番変ロ長調 KV281 (189f)

「デュルニッツ・ソナタ集」の第3曲にあたるこのソナタは、なかなか華麗な趣をもち、クラヴィーアの名人芸を、存分に楽しませる。アンダンテ・アモローソ（情愛をこめて）という珍しい指定をもつ第2楽章は、若いモーツァルトの、恋の物思いであろうか？ その曲想はこ

とのほか甘く、親密である。フィナーレは、ガヴョット風の主題によるロンド。フランス風に洗練された音楽だが、主題の2度目の出現のあとには、短調による、思いのほかドラマチックなパッセージも織りこまれている。

第1楽章 アレグロ、変ロ長調、4分の2拍子。

第2楽章 アンダンテ・アモローソ、変ホ長調、8分の3拍子。

第3楽章 ロンドー；アレグロ、変ロ長調、2分の2拍子。

■ピアノ・ソナタ第4番変ホ長調 KV282 (189g)

「デュルニッツ・ソナタ集」の第4曲。これまでの3曲とは構成を変え、ここではゆっくりした楽章が初めに置かれている。このためこのソナタは、落ち着いた、しっとりした味わいをもつ作品という印象を与える。第2楽章はメヌエットで、第1メヌエットよりも大きくて手のこんだ第2メヌエットが、トリオ（中間部）の働きをする。フィナーレは、第1楽章とよく対照をなす、生気にあふれた音楽である。

第1楽章 アダージョ、変ホ長調、4分の4拍子。

第2楽章 メヌエットⅠ、変ロ長調
メヌエットⅡ、変ホ長調、4分の3拍子。

第3楽章 アレグロ、変ホ長調、4分の2拍子。

■ピアノ・ソナタ第5番ト長調 KV283 (189h)

「デュルニッツ・ソナタ集」の第5曲。明るく引き締まった作品で、リズムの創意にあふれている。イタリア音楽からの影響を、とくに指摘する意見もある。第1楽章の簡潔な開始を耳にただけで、このソナタの魅力は明らかだろう。前へ前へと進む推進力の爽快さは、六つのソナタの中でも傑出したものである。彫りの深い第2楽章のあとには第1楽章に劣らず活発なフィナーレが来て、みごとな演奏効果のうちにバランスを保ちつつ、全曲が閉じられる。

第1楽章 アレグロ、ト長調、4分の3拍子。

第2楽章 アンダンテ、ハ長調、4分の4拍子。

第3楽章 プレスト、ト長調、8分の3拍子。

■ピアノ・ソナタ第6番二長調 KV284 (205b)

《デュルニッツ》

このソナタは、デュルニッツ男爵のために書かれた、6曲のソナタの最終曲にあたる。一般にこの曲のみが《デュルニッツ・ソナタ》と呼ばれるのは、最近まで、この1曲だけが男爵に捧げられたと考えられてきたからである。全6曲の最後を飾るだけに、このソナタは、6曲中もっともスケールが大きい。とくにガヴョット

調の主題による変奏曲フィナーレは、12の変奏をもつ、長大なものである。総じてここにはフランスのギャラント様式の影響がみられ、技術的な要求も、かなり高度になっている。モーツァルトは、2年後に行なわれたマンハイム・パリ旅行の際、このソナタをとくによく演奏したという。

第1楽章 アレグロ、二長調、4分の4拍子。

第2楽章 ボロネーズによるロンドー。

アンダンテ、イ長調、4分の3拍子。

第3楽章 アンダンテ（主題と変奏）、二長調、2分の2拍子。

■ピアノ・ソナタ第7番ハ長調 KV309 (284b)

モーツァルトは、1777年から78年にかけて、彼の成長にとって重要な「マンハイム・パリ旅行」を行なった。この旅行中には3曲のピアノ・ソナタが書かれているが、ハ長調KV309は、2曲の「マンハイム・ソナタ」のひとつである。これはマンハイムの宮廷楽団のコンサートマスターをつとめていた音楽家クリスティアン・カンナビヒの、当時13歳の娘ローザのために作曲された。「カンナビヒには、ピアノをとてきれいに弾く娘さんがひとりいます。ぼくはカンナビヒと友達になったので、いまそのお嬢さんのためにソナタを書いています。それはも

うロンドのところまで進んでいます」(11月4日付の父宛の手紙)。とくに第2楽章は「ローザ嬢の性格に合わせて」書かれたものであるという。音楽は、マンハイム楽派の交響様式の影響をはっきり見せ、とくにダイナミズムの変化に富んだ扱いが新鮮である。ソナタ形式をとっている章では、展開部が充実のきざしを示しており、主題の再現にも、工夫がこらされている。

第1楽章 アレグロ・コン・スピーリト、ハ長調、4分の4拍子。

第2楽章 アンダンテ・ウン・ボコ・アダージョ
ヘ長調、4分の3拍子。

第3楽章 ロンドー；アレグレット・グラツィ
オーソ、ハ長調、4分の2拍子。

■ピアノ・ソナタ第8番二長調

KV311 (284c)

二長調KV311は、ハ長調KV309とともに、1777年のマンハイム滞在中に書かれたものである。完成は、ハ長調と同じく11月の初めと考えられる。モーツァルトは、1774年から翌年にかけてミュンヘンに旅行した際、フォン・フライジンゲン家の令嬢ヨゼーファから、ピアノ・ソナタの作曲を依頼された。彼はさっそく手をつけたものの、途中で中断して、そのままにしまった。1777年11月5日のペーザレ宛書簡に

基づくサン＝フォアの推定によれば、この草稿こそ二長調ソナタの原作であり、モーツァルトはこれをマンハイム旅行の際3年ぶりに取りあげて完成させ、それをミュンヘンに送ったのであるという。

音楽は、軽やかな遊びの精神に満たされながらも、そこに、マンハイム楽派の交響管弦楽様式の影響を示している。たとえば、第3楽章のロンドーで主題が3回目に出現する前にカデンツァ（主題を引き出すアインガング）が挿入されるのはピアノ協奏曲の技法であり、モーツァルトがここで、ソナタの中に協奏曲の要素を取り入れようとしていることが理解される。こうしてモーツァルトのソナタは、次第にスケールの大きなものになってゆくのである。

第1楽章 アレグロ・コン・スピーリト（生氣をもって）、二長調、4分の4拍子。はつらつたるソナタ形式楽章で、展開部では、「マンハイムのため息」と呼ばれる音型の活躍が目立つ。

第2楽章 アンダンテ・コン・エスプレッシオーネ（表情をもって）、ト長調、4分の2拍子がこれに続く。ここでは静かな歌の中へ急にフォルテの楽句が割って入るのが面白く、マンハイム楽派の得意とした強弱法の効果が追求されている。

第3楽章 ロンドー；アレグロ、二長調、8

分の6拍子で、それはさらに、協奏曲風の広がりへとみたらされる。

■ピアノ・ソナタ第9番イ短調

KV310 (300d)

モーツァルトのロマンを愛する人で、このソナタに魅かれぬ人はあるまい。当時のピアノ・ソナタがモーツァルト自身を含めて明るく軽快な表現に向かっていた中で、この作品は珍しく短調を取り、魂の嵐とも形容したいような暗いバストをみなぎらせている。「ト短調交響曲」に代表されるデモニッシュな短調作品の、これは小さな代表作のひとつである。

作曲は、1778年のパリ滞在中に行なわれた。その7月、同行した母が病没して、モーツァルトに大きな心理的衝撃を与えたが、それにまつわる不安あるいは悲しみが、この作品に投影しているとみる者もある。「彼の苦悩と絶望は、このソナタの中に、心を打つばかりに響きわたっている」（ヴァルター・ゲオルギ）。

第1楽章 アレグロ・マエストーソ、イ短調、4分の4拍子、ソナタ形式。「マエストーソ」（荘重に）の性格をもった主題が不協和な前打音に導かれて始まり、ここに含まれる付点リズムが、いくぶん息苦しい重圧感をもって、楽章を支配する。第2主題はハ長調で出るが、基調と

なる緊迫感はこの部分を通じてもお影を落としており、再現部においては、この主題すらイ短調に帰着してしまう。付点リズムが *f* で、また *pp* で荒れ狂う展開部は、この楽章のすぐれた聴きどころである。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ・コン・エスプレッショネ（表現をもって歌うように）、ヘ長調、4分の3拍子。内省的な楽章だが、慰めの中に、やはり不安な心の動揺がひそんでいる。ソナタ形式をとり、展開部はここでも劇的である。

第3楽章 プレスト、イ短調、4分の2拍子のロンド。中ほどでイ長調のミュゼット風エピソードなどを織りこみながらも、音楽は情熱をたたえて激しく進み、長調への解放も行なわれぬまま、終止の和音に達する。

■ピアノ・ソナタ第10番ハ長調 KV330 (300h)

この作品は、長らく、1778年の夏にパリで作曲されたと考えられてきた。しかし最近の研究によればその成立はもっと下り、おそらく1783年にウィーンで（または里帰りして滞在していたザルツブルクで）作曲されたと考えられるに至っている。このため、ここに接したばかりのフランス趣味の反映があるとする従来の見方は崩れてしまったが、それでも、このソナタが玲

瓏たる魅力をもった、とりわけモーツァルト的な作品のひとつであることには変わりがない。A・アインシュタインは、これを「かつてモーツァルトが書いたもっとも愛らしいもののひとつ」であるとしている。

第1楽章 アレグロ・モデラート、ハ長調、4分の2拍子。澄んだピアノの音が磨かれた玉のように転がっていくとも言え、この楽章の趣を伝えられるであろうか。ソナタ形式をとるが、第2主題部では、いくつかの可憐な楽想が相次いであらわれる。展開部はかなり簡潔に扱われて、すべるように主部の再現を導く。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ（歌うように）、ヘ長調、4分の3拍子。決して複雑ではないが、美しいニュアンスに満たされている。主題の後半、低音部に力強い上行音型が出たあと、変音の導入によって音楽がふっと暗む絶妙の効果に、耳を傾けていただきたい！中間部はヘ短調となり、舟歌風のしみじみした調べが歌われる。

第3楽章 フィナーレは、アレグレット、ハ長調、4分の2拍子でソナタ形式をとる。推移部にははっきりしたテーマがあり、展開部においても新しい旋律があらわれるため、音楽の構成は一見多面的であるが、その中におのずから成る統一が作り出されていて、よどみない流れ

のうちに、曲を結ぶ。

■ピアノ・ソナタ第11番イ長調 KV331 (300i)

《トルコ行進曲つき》

モーツァルトのピアノ・ソナタのうちでも、もっとも広く愛奏されている作品。モーツァルトの全作品を見わたしても、これはきわ立って親しみやすく、美しい作品のひとつに数えられる。前作と同じように、このソナタの成立年代もまた、1778年のパリ滞在中でなく、ウィーン時代の1783年頃と考えられるようになっていく。おそらくこのソナタは、オペラ《後宮からの逃走》KV384の傍らに位置づけられるのではないのだろうか。なぜならば、このオペラはトルコを舞台にしている、ソナタの第3楽章に見るようなトルコ風音楽を、劇中に使っているからである。モーツァルトは、トルコ風のエキゾチックな音楽が当時のウィーンで流行していたことに目をつけ、それをオペラばかりでなくピアノ曲にもとり入れて、世に親しまれるソナタを作りたいと願ったのであろう。

しかし、フィナーレにトルコ行進曲を置いたことだけが、このソナタの特徴であるわけではない。第1楽章が変奏曲になっていること、第2楽章がメヌエットになっていることも、この作品のユニークな特徴に数えられる。つまりこ

のソナタには、ふつうもっとも重んじられるソナタ形式の楽章が登場しないのである。演奏技巧も比較的やさしく、モーツァルトがウィーンのアマチュアを念頭に置いて作曲したことを推測させる。

第1楽章 アンダンテ・グラツィオーソ（優美に）、イ長調、8分の6拍子による変奏曲である。優雅な主題が、ミノーレ（短調変奏）、アダージョ、アレグロを含む、六つの変奏を受けてゆく。

第2楽章 イ長調のメヌエット、4分の3拍子。伝統ある舞曲メヌエットは、交響曲、セレナード等において当時なお大切な構成要素となっていたが、ピアノ・ソナタで用いられるのは比較的珍しく、モーツァルトのソナタにおいても、このほか第4番にあらわれるだけである。しかし、このメヌエットはなかなかの力作で、主部と二長調のトリオ（中間部）はどちらも、それ自身ひとつのソナタ形式と称してもよいような、調性と楽想の配分をもっている。

第3楽章 あまねく有名な《トルコ行進曲》（指定は「アラ・トゥルカ〔トルコ風に〕」）、アレグレット、イ短調、4分の2拍子が、ソナタの締めくくりをなす。形式は、いくぶん変則的なロンド形式。図示すると、A-B-C-B-A-B'-コーダとなる。軽やかに走り出すA部

分に続くB部分（イ長調）は、ユーモラスな行進のありさまをほうふつとさせる。このあとにあらわれる嬰へ短調のパッセージ（C）は、おそらく、この行進曲におけるもっとも美しい靈感に数えられよう。

■ピアノ・ソナタ第12番へ長調 KV332 (300k)

1781年、25歳のモーツァルトはザルツブルクからウィーンに出て、円熟期の創作活動を開始した。その初期、おそらく83年ごろに（ウィーンで、または里帰り中のザルツブルクで）書かれたと推定されるピアノ・ソナタのひとつが、このへ長調KV332である。このソナタは、前後して書かれた《トルコ行進曲つき》ソナタの陰に隠れてはいるけれども、モーツァルト・ファンにとっては、見逃せない作品である。なぜならば、よどみない流れの中に独奏的な工夫を盛りこんだり、やさしい曲想の中から思いがけず真率な情熱を導き出したりというモーツァルト特有の技法が、このソナタに典型的に示されているからである。

第1楽章 アレグロ、へ長調、4分の3拍子、ソナタ形式。のびやかな第1主題によって始まる。これにはすぐリズムミクな旋律が続き、曲は明るく素朴な気分のまま進んでゆくように思われる。ところが突然ニ短調の激しいパッセー

ジが行く手をさえぎり、聴き手をしばし緊張の中へと投げこむ。そして、これが一段落したところで、何事もなかったかのような明るさをもって、ハ長調の第2主題が姿を見せるのである。こうした気分の変化、意表をつく起伏は、以下の作品全体を通して、何度も、聴き手に新鮮な印象を目覚めさせる。

第2楽章 アダージョ、変ロ長調、4分の4拍子、ソナタ形式。左手の伴奏を背景に右手がきめ細かく旋律を歌わせるスタイルで書かれ、艶麗な中に、繊細なニュアンスが漂っている。第1主題がいつしかへ短調で終わり、そこからへ長調の第2主題があらわれてくるあたりの書法は、とりわけ含蓄が深い。

第3楽章 アレグロ・アッサイ、へ長調、8分の6拍子。ソナタ形式による、奔放かつ意欲的なフィナーレである。

■ピアノ・ソナタ第13番変ロ長調

KV333 (315c)

従来、モーツァルトは1778年のパリ滞在中に前作KV332を含む五つのピアノ・ソナタを書いたとされ、変ロ長調KV333は、その最後に立つ大作と考えられてきた。しかし新しい学説よれば、《パリ・ソナタ》はイ短調KV310の1曲のみであり。このKV333は、1783年の末に、ザル

ツブルクへの里帰りの帰途立ち寄ったリンツで作曲されたと見なされるようになっている。その意味でこれは、《リンツ交響曲》の姉妹作といえよう。このソナタを語るときよく指摘されるのは、大パッハの末息子、ヨハン・クリスティアン・パッハの音楽との親近性である（たとえば第1楽章の軽快でなめらかな流れ）。J.C.パッハは1782年に亡くなっているから、前記の成立年代が正しいとすれば、この作品は、亡き先輩にモーツァルトがオマージュを捧げたものとみることができるかもしれない。モーツァルトは、子供のころから、J.C.パッハのギャラント様式に、大きな影響を受けてきたのだった。またこのソナタは、典雅さのうちにも協奏曲風のスケールの大きさをあわせ持っている。その意味でこれは、モーツァルトがニ長調KV311で試みたものの、新たな発展であるといえよう。

第1楽章 アレグロ、変ロ長調、4分の4拍子のソナタ形式。人なつこいほほえみをたたえながら音楽は流れるように進み、演奏効果も、協奏曲を想起させるように華麗である。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ（歌うように）、変ホ長調、4分の3拍子。本格的なソナタ形式をとる歌にみちた緩徐楽章で、翳りを帯びた展開部のあと、第1主題が、新たな装飾にいろどられて再現する。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ（優美に）、変ロ長調、2分の2拍子。可憐な主題によるロンド楽章である。この楽章で注目されるのは、ロンド主題の3回目の出現のあと副主題の再現を経てあらわれる、28小節の大カデンツァであろう。モーツァルトはここで、ソナタの枠組を大きく乗り越えて前進している。

■幻想曲ハ短調 KV475

■ピアノ・ソナタ第14番ハ短調 KV457

この二つの作品は、元来は別々に作曲されたものと思われるが（幻想曲は1785年5月20日、ソナタは1784年10月14日の完成）、1785年の初版（ウィーン、アルターリア社）において2曲組み合わせで発表されたため、以来、両曲を続けて演奏するのが習慣となっている。

モーツァルトは、ウィーンで、書籍出版業を営んでいたフォン・トラットナー夫妻と親交を結び、夫人に、1781年からピアノを教えていた。1784年、モーツァルト一家は「トラットナーホーフ」というこの夫妻の邸宅に住んでいたが、手狭なため、今日「フィガロ・ハウス」として知られる新しい住居に移った。ソナタハ短調は引っ越しの半月あと、幻想曲ハ短調は半年あとに書かれ、トラットナー夫人に捧げられている。両曲の音楽的内容を考えれば、トラットナー夫

人は、よほど優れた芸術性と人格の持ち主だったのであろう。

幻想曲ハ短調は、モーツァルトがウィーンで受けたバッハ、ヘンデルの影響をすっかり消化し、自分自身の音楽として豊かな幻想を歌い出した名作である。六つの部分が作品を構成する(アダージョ、ハ短調、4分の4拍子——同、ニ長調——アレグロ、転調部——アンダンティーノ、変ロ長調、4分の3拍子——ピウ・アレグロ、転調部——プリモ・テンポ、ハ短調、4分の4拍子)。しかし、各部分には有機的な靈感の流れが保たれ、きわめて多彩な変化が、おのずからなる統一感のうちに実現されている。

続くソナタハ短調 KV457は、モーツァルトのピアノ音楽創作のひとつの中核を成す、重く深い内容をもったソナタである。またこれは、種々の点で、来たるべきベートーヴェンのソナタ群を予告している。冒頭に幻想曲を置いて演奏すれば、その音楽の深さ、重さは、いっそう強く心に迫ってくる。

第1楽章 アレグロ (自筆譜の指示。初版ではモルト・アレグロ)、ハ短調、4分の4拍子、ソナタ形式。力強い第1主題に起こって堂々と進み、第2主題を、主部においては変ホ長調で、再現部においてはハ短調で出す。末尾には、第1主題に始まるコーダが置かれ、力を弱めてひ

っそりと終止する。

第2楽章 アダージョ、変ホ長調、4分の4拍子、ロンド形式。幻想性の豊かな楽章で、和声的な創意に富み、音楽の影も深い。これが大きく発展したあと、

第3楽章 モルト・アレグロ (初版ではアレグロ・アッサイ)、ハ短調、4分の3拍子のフィナーレに入る。これは、シンコペーションの主題をもつ、不安気ながら美しい音楽である。

■ピアノ・ソナタ第15番ハ長調

KV533+494

このソナタの第1楽章と第2楽章は、1788年(すなわち三大交響曲の年)の1月3日にウィーンで完成され、第3楽章は、1786年(すなわち《フィガロ》の年)の6月10日に、同じくウィーンで完成された。つまりこの作品は、別々に書かれた楽章を合成して生まれたソナタである。しかしモーツァルトの生前(1788年)にウィーンのホフマイスター社から発行された初版にはすでにこの形があらわれているため、その構想がモーツァルト自身に由来することは確実である。

このソナタにおいて注目されるのは、はじめの二つの楽章の、ユニークな個性であろう。それらはモーツァルトには珍しいほど硬質の厳し

い曲想をもち、対位法が豊富に使われていると同時に、和声的にも大胆である。この両楽章における緊張をロンドが明るく解放するわけであるが、このロンドの初版には、自筆譜にはない26小節が、終わり近くで付け加えられている。この付加は、出版の際モーツァルト自身によって行なわれたというのが通説で、演奏の際にも、普通初版の形がとられる。

第1楽章 アレグロ、ハ長調、2分の2拍子、ソナタ形式。同年の《ジュピター交響曲》を先取りするような、模倣対位法の活用がみられる。第1主題と二つの第2主題は、いずれもカノン風に処理されている。

第2楽章 アンダンテ、変ロ長調、4分の3拍子、ソナタ形式。意表を突く和声と不均整な楽節構造をもつ主題旋律に、すでにこの楽章の独創性がうかがえる。厳しい曲想を持つ展開部では、転調が重ねられる。

第3楽章 フィナーレは、アレグレット、ハ長調、2分の2拍子、ロンド形式。親しみやすい主題が少しずつ形を変えて再帰し、そこに、変化に富むエピソードがはさまこまれてゆく。

■ピアノ・ソナタ第16番ハ長調 KV545

「初心者のための小ピアノ・ソナタ」。モーツァルト自身が教育用に使ったものと思われ、技

巧を切り詰めて、やさしく書かれている。「ソナチネ・アルバム」に採用されて子供たちに広く愛奏されているのは、周知の通りである。簡単な作品であるが、音楽の価値は決して低いものではなく、三つの楽章はいずれも、モーツァルトのみのよくしうる天衣無縫の魅力に輝いている。作曲は、1788年。同じ日(6月26日)に、交響曲第39番変ホ長調が脱稿された。

第1楽章 アレグロ、ハ長調、4分の4拍子、ソナタ形式。晴朗な主題に始まる整った楽章だが、第1主題がハ長調で再現するのは珍しい。

第2楽章 アンダンテ、ト長調、4分の3拍子、三部形式。のどかな旋律が歌いつがれてゆけど、モーツァルトは、淡々とした流れの中にも種々の魅力的な工夫をこらしており、ト短調で始まる中間部には、一種幻想的な趣さえ見られる。

第3楽章 フィナーレは、ハ長調、4分の2拍子の明るいロンド。カッコーの鳴き声のような主題はエピソード部分にも入りこんで、全体の統一を図っている。

■ピアノ・ソナタ第17番変ロ長調

KV570

1789年、2月にウィーンで作曲されたこの作品を境に、モーツァルトのピアノ・ソナタには、

晩年の様式があらわれてくる。つまりここでは、変ロ長調KV333に見られたような華麗さへの好みやハ短調KV457に見られた深く大きな音楽への傾向が影をひそめ、簡素で澄みわたった響きが支配的なのである。当時、モーツァルトの生計は苦しさを増し、それに比例して、作曲に腕をふるうチャンスも少なくなってきてしまっていた。そんな中で生み出されたこのソナタは、モーツァルトがますます純粋な音楽の境地に達していたことをよく示すものであるといえよう。なおこのソナタには、別人（J.メーデリッチュ？）がヴァイオリン・パートを付した版があり、この曲はむしろその形で、作曲者の死後、世に知られた。

第1楽章 アレグロ、変ロ長調、4分の3拍子、ソナタ形式。ユニゾンで奏される、穏やかに澄んだ第1主題に始まる。第2主題は、この主題をヘ長調で低音に出し、高音部に新しい旋律を対置したものである。第2主題は展開部の後半でも扱われ、その対位的な性格をきわ立たせる。

第2楽章 アダージョ、変ホ長調、4分の4拍子、ロンド形式。主題はリート風な素朴さをもって歌われ、これがハ短調と変イ長調のエピソードをはさんで戻ってくる。静かで含蓄のある、しかし不思議に明るい音楽である。

第3楽章 アレグレット、変ロ長調、2分の2拍子。形式はロンド形式とみることができようが、軽やかな主題は2回しか姿を見せない。その間には二つの、これも軽やかなエピソードが奏され、その二つが曲尾で結合される。

■ピアノ・ソナタ第18番ニ長調 KV576

モーツァルトが書いた最後のピアノ・ソナタ。1789年4月から6月にかけて、モーツァルトはドイツを旅行し、ベルリンを訪れて、プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世の御前で演奏した。チェロの弾き手であった王はモーツァルトに六つの弦楽四重奏曲の作曲を依頼し、さらに王女フリーデリーケのために、6曲のやさしいピアノ・ソナタを注文したといわれる。帰郷後モーツァルトはその創作にかかったが、完成されたのは、結局弦楽四重奏曲3曲（《プロシャ王》セット）と、ピアノ・ソナタ1曲のみであった。そのただ一つのソナタがこのニ長調で、やさしいどころか、モーツァルトのソナタ中でも、もっとも演奏が困難な作品になっている。

このソナタの特徴は、バロック的な対位法が大いに活用されていることだろう。これもまた北ドイツ旅行の遺産であったとみることができる。なぜなら、モーツァルトは道中ライブツィ

ヒの聖トーマス教会に立ち寄り、ウィーンに出て以来親しんでいたJ.S.バッハの芸術の記憶を、新たにしたからである。

第1楽章 アレグロ、ニ長調、8分の6拍子。ソナタ形式であるが、曲想にはどこか、パロックのトッカータのような趣がある。対位法はとくに展開部と、再現部の推移句に用いられている。

第2楽章 アダージョ、イ長調、4分の3拍子。静かな主部とところもち興奮した中間部が対比される三部形式で、嬰ハ短調の中間部においては、幻想曲風の発展がみられる。

第3楽章 フィナーレ、アレグレット、ニ長調、4分の2拍子のロンド。ここでは左手と右手の独立的な扱いが目立っており、エピソードは、ロンド主題を対位的に扱ったものとなっている。

（1994年のCD：COCO-80842～6より転載）

■CD取り扱い上のご注意 ●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。

■保管上のご注意 ●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。